

# ゴンザの『新スラヴ日本語辞典日本版』(1985)の 訳注の問題点 その2

いぬかい いて  
pxi13713@nifty.ne.jp

## 【要約】

18世紀に漂流者ゴンザがつくった「新スラヴ・日本語辞典」は、1985年に村山七郎が訳注をくわえて日本で出版された。オリジナルから日本版への転写は正確におこなわれているが、あらたにかきくわえられた部分には問題点がおおい。発見された日本版の問題点を、ロシア語の誤訳、ゴンザの訳語の誤解釈、ゴンザの誤訳に気づいていない、の3種類に分類して列挙した。ゴンザの執筆意図をできるかぎり正確に解釈することにつとめたい。

## 0. はじめに

「新スラヴ・日本語辞典」は、ロシアの言語学者アンドレイ・ボグダーノフと、ロシアに漂着した日本語のよみかきのできない日本人の少年ゴンザが1738年に完成させた、世界初の露和辞典である。語数約12,000のすべてがキリル文字でかかれており、当時の薩摩方言を記録した貴重な資料である。

1960年代に「新スラヴ・日本語辞典」を発見した村山七郎が1985年に訳注をくわえて出版した日本版は、薩摩方言の研究者にとってつかいやすい資料になった。日本版は、原本のほぼすべての項目をふくんでおり、つぎの改良がくわえられた。

- 1) ロシア語のみだし語を手がきから活字にした。
- 2) みだし語の日本語訳をつけた。
- 3) ゴンザの訳語を手がきのキリル文字からカタカナの活字にした。
- 4) ゴンザの訳語から現代日本語への橋わたしとなる注をつけた。
- 5) ゴンザの訳語だけをアイウエオ順にならびかえたゴンザ語彙リストを巻末につけた。

皮肉なことに、1)と3)の作業の結果が信頼できるために、それを利用して、2)、4)、5)に関する問題点を発見することができた。

## 1. 『新スラヴ・日本語辞典日本版』の訳注の検討

本稿は、2016年5月に日本方言研究会で発表したものにひきつづき、発見した疑問点について、

- 1) 日本版のロシア語解釈の問題
  - 2) ゴンザの訳語の日本版による解釈の問題
  - 3) ゴンザのロシア語解釈がまちがっていることに日本版が気づかなかったこと
- の3つに分類して紹介する。

## 2. 日本版のロシア語解釈に問題があるため、ゴンザの訳語がただしくつたわらない項目

ロシア語 (ラテン文字転写) 「日本版訳」 『ゴンザ訳』 「日本版注」 (以下おなじ)

2. 1 икра рыбья (ikra rybiya) 「イクラ」 『いをんこ』 「魚の子」

ロシア語から現代日本語にはいつてきた「イクラ」といえば「鮭の子」だが、ロシア語では魚卵の総称である。ゴンザも魚卵の総称の意味で『いをんこ』という訳語をかいているのである。

2. 2 братец (bratets') 「弟」 『しゃちえ』 「舎弟」

братец (bratets')は「兄弟」に指小形がついたものである。「兄」に限定すれば「あんちゃん」とか「あにき」という訳語がかんがえられるが、「兄」と「弟」に共通した呼称は日本語にはないので、ゴンザはくしまぎれに『しゃちえ』「舎弟」という訳語をかいた。日本版は「弟」ではなく、(「兄弟」に指小形がついたもの)という訳語をかかなければならない。

2. 3 сочевница (sochevitsa) 「扁桃」 『 』

сочевница (sochevitsa)は「レンズ豆」である。ゴンザが訳語をかけなかったのはアーモンドではない。

2. 4 опасный (опасnyi) 「用心深い」 『ゆじんのと』 「用心の」

опасный (опасnyi)は「用心深い」ではなく「あぶない」という意味で、ゴンザの『ゆじんのと』は「用心の必要な」という意味である。

2. 5 ревную (revnuyu) 「熱中する」 『よくういする』 「欲にする」

ревную (revnuyu)には「熱中する」という意味もあるが、第一義は「ねたむ」という意味で、ゴンザの『よくういする』も「ねたむ」という意味である。

2. 6 долбня (dolbnya) 「穴をあける道具」 『わらうち』 「藁打ち(?)」

долбня (dolbnya)は穴をあける時にもつかうけれど「木づち」のことで、ゴンザの『わらうち』も「木づち」のことである。

2. 7 разгорожаю (razgorozhayu) 「仕切る」 『しきった あくる』

разгорода (razgoroda) 「仕切りすること、仕切り壁」 『しきらんこと』

разгорода (razgoroda)には「しきること」と「しきりをはずすこと」の相反するふたつの意味があることに日本版は気づかず「しきること」だけをかいたが、ゴンザ訳は「しきりをはずすこと」である。

2. 8 дыня (dynya) 「メロン」 『すいくわ』 「西瓜」

教会スラヴ語にちかいブルガリア語では「スイカ」の意味であり、ゴンザも「スイカ」をかんがえていたとおもわれる。

3. ゴンザの訳語の日本版による解釈に問題がある項目

3. 1 девятижды (devyatizhdy) 「9回」 『ここのけい』 「九回」

сторатно (stokratno) 「100回」 『ふいやつけい』 「百回」

тмишно (tmishchno) 「無数に」 『ふいやつけい』 「百回」

елижды (elizhdy) 「幾回、何回」 『いつけい』 「幾回」

мног о ж д ы (mnogozhdy) 「幾回も」 『いっけいも』 「幾回も」

現代日本語の「かい」はゴンザのことばでは『け』に対応する。「貝」も「權」も「階」もゴンザのことばでは『け』になる。また、現代日本語の「り」「れ」はゴンザのことばでは『い』『いえ』に対応することがおおい(以下、3.3、3.6も同様)。ゴンザのことばの『けい』に対応する現代日本語は「かえり」である。

日本国語大辞典 「かえり(反・返・帰・還)②(接尾)数や、数の不定を表わす和語につけて、回数を表わす。たび。回。度。」

3. 2 б о ч а р ь (bochar') 「桶屋」 『おけい』 「桶屋」  
д е л в о д е л я (delvodelya) 「桶屋」 『おけい』 「桶屋」

『おけい』は「おけや」が変化したものではなく、「桶結」(おけゆい)が変化したものである。

日本国語大辞典 「ゆいおけし(結桶師) 桶にたがをかける人。桶をつくる職人。桶屋。」

3. 3 к о р е н ь (koreni) 「根」 『きのねばい』 「木の根ばい」

『きのねばい』は「木の根がはうこと」ではなく「木の根がはること」である。

日本国語大辞典 「ねはり(根張) 木や草の根が土中に張り広がること。根のはびこること。(方言)②根。(ねばり) 宮崎県東諸郡、鹿児島県肝属郡」

3. 4 п р о т и в л ю с я (protivlyusya) 「逆らう」 『むこいかくる』 「向いかくる」

日本版はゴンザの『むこ』が(さからって)という意味であることは理解しているが、『いかくる』の部分の説明をしていない。ゴンザは н а у с т я ю (naustyayu) (そそのかす)の訳語として『いかくる』とかいており、現代日本語の「いいかける」にあたる。

日本国語大辞典 「いいかける(言掛)③無実のことを、その人の責任のように偽り言う。言いがかりをつける。難癖をつける。」

3. 5 р а з ы с к и в а ю (razyskivayu) 「探索する」 『たねやう』 尋ね合う  
у п а и в а ю (upaivayu) 「すっかり結合する」 『しやう』 為合う  
у р а з у м е в а ю (urazumevayu) 「会得する」 『しりやう』 知り合う  
р а з в е д ы в а ю (razvedyvayu) 「知ろうと努める」 『しりやう』 知り合う  
о т п ы т ы в а ю (otpytyvayu) 「探る」 『しりやう』 知り合う  
с р а з у м е в а ю (srazumevayu) 「知り合う」 『しりやう』 知り合う  
п р о з н а в а ю (proznavayu) 「知り合う」 『しりやう』 知り合う  
у с м о т р я ю (usmotryayu) 「見張る」 『みやう』 見合う  
о с м о т р я ю (osmotryayu) 「よく見る」 『みやう』 見合う  
р а з с м о т р я ю (razsmotryayu) 「熟視する」 『みやう』 見合う  
п о г л я д а ю (poglyadayu) 「視る、眺める」 『みやう』 見合う  
п о д з и р а ю (podzirayu) 「のぞく、ぬすみ見る」 『みやう』 見合う  
п р и с м а т р и в а ю (prismatrivayu) 「見合う」 『みやう』 見合う

知覚系の動詞についた『一やう』は「相互」の意味のほか「十分に」という意味をもつことがある。ここにあげたものは「相互」ではなく「十分に」という意味である。

日本国語大辞典 「あう (敢) ② (他の動詞の下に付いて、補助動詞的に用いる) 十分にそうする。完全にそうする。押し切ってそうする。」

|      |                          |         |       |
|------|--------------------------|---------|-------|
| 3. 6 | ф о р т у н а (fortuna)  | 「運命、幸運」 | 『かいい』 |
|      | щ а с т и е (shchastie)  | 「幸福、幸運」 | 『かいい』 |
|      | с ч а с т и е (schastie) | 「幸福、僥倖」 | 『かいい』 |

日本版注 cf. カ 報、運。山口県大島・高地 (高知のあやまり) TZH.

日本版注はゴンザの『かいい』を山口県・高知県の方言の「カ」で説明しているが、音韻の変化については説明していない。

『かいい』は「せおう」という意味の薩摩方言の「かるう」から派生した名詞「かれ」で、「せおっているもの=運」という意味である。(北山 1965)

### 3. 7 м н о г о п а м я т н ы й (mnogopamyatnyi)

「多く記憶される場所の、遺徳の顕著な」『たくせしょんと』「沢山賞の(?)」

ほかの項目でゴンザは「知恵、記憶」という意味で『しょ』ということばをつかっている。漢字をあてると「賞」ではなく「性」である。『たくせしょんと』は (たくさんの「性」 (記憶) の) という意味である。

### 3. 8 в а т а г а (vataga) 「徒党」 『ちえのぢ』 「手の地 (?) 人々の集まる所か」

『ちえのぢ』は「むれる」という意味の動詞『ちえなむ』 (てなむ) のテ形で「むれて」というような意味になる。

日本国語大辞典 「てなむ (連並) (方言) 連れだつ。同行する。宮崎県西諸郡加久藤、鹿児島県」

## 4. ゴンザのロシア語解釈に問題があることに、日本版が気づかなかった項目

### 4. 1 п р и р а с т а ю (prirastayu) 「成長して一体となる」 『とくる』 「溶くる」

語の後半 р а с т а ю (rastayu) 「成長する」の部分をつづりのよくにた р а с т а я в а ю (rastayavayu) 「溶ける」とゴンザがまちがえた。日本版はゴンザの『とくる』を「とけて一体になる」と解釈しようとした。

### 4. 2 н е у с ы п н ы й (neusypnyi) 「眠らぬ」 『ねすぎんと』 「寝過ぎんと」 н е у с ы п н о (neusypno) 「眠らずに」 『ねすぎんこと』 「寝過ぎんこと」

н е у ・ с ы п н ы й (neu-sypnyi) 「いまだない・ねる」と分節しなければならないものを、ゴンザが н е ・ у с ы п н ы й (ne-usypnyi) 「ない・ねすぎる」と分節してしまったことに日本版は気づいていない。

### 4. 3 и з с т у п л я ю (izstuplyayu) 「有頂天になる」 『きがつまる』 「気がつまる」

みだし語は (気がたかぶる) という意味なのに、ゴンザが語の後半を т у п е ю (tupeyu) 「こぶる」と混同して、否定的な意味の訳語をかいてしまったことに日本版は気づいていない。

### 4. 4 с с е к а ю (ssekayu) 「切り離す」 『すたむる』 「漚 (した) むる (?)」

日本版はゴンザの『すたむる』が(水分をのぞく)という意味の「湍(した)める」であると解釈できたが、みだし語との意味のちがいの原因がわからなかった。ゴンザはс е к-(sek)「きる」という語根をс я к н-(syakn-)「水がかかる」という語根とまちがえたのである。

#### 4. 5 б р а н и н а ч а л н и к ъ (braninachalnik')

「軍の長官」

『ふあよからがるふと』 「早うからがる人」

cf. ガル 叱る。九州。TZH

語のはじめのб р а н (bran)は、「しかること」と「戦闘」の同音異義語で、ゴンザは、「戦闘」の「(はじまり)の(人)」＝「戦闘」の「トップの人」＝「最高司令官」を「叱責の(はじまり)」の「人」＝「しかることのはやい」「人」＝「すぐしかる人」に訳してしまった。日本版は同音異義語に起因した誤訳に気づいていない。

#### 5. おわりに

「新スラヴ・日本語辞典」の執筆方法に関して、

- 1) ゴンザをインフォーマントとしてつかってボグダーノフが執筆した。
- 2) ゴンザ自身が執筆した。

という2説がある。

もし1)であるとすると、方言調査のように、ボグダーノフはゴンザに絵や実物をみせたり、ことばで説明したりしながら、日本語でなんというか質問して、回答をキリル文字でかきとっていった、ということだろう。

しかし、内容を精読すれば、ロシア語と日本語の両方をしている者が、ロシア語を形態素ごとにくぎったりして、苦心しながらふさわしい日本語の訳語をあてはめていった様子が推測できる。

ボグダーノフがみだし語の選定をして、ゴンザが訳語を執筆して、必要な場合にはボグダーノフが援助した、というのが、辞書執筆の態勢だったと私はかんがえている。

#### 参考文献

いぬかいいて(2016)「ゴンザの『新スラヴ日本語辞典日本版』(1985)の訳注の問題点」『日本方言研究会第102回研究発表会発表原稿集』, 13-20

上村忠昌(2006)『漂流青年ゴンザの著作と言語に関する総合的研究』南日本新聞開発センター

上村忠昌(2016)『鹿児島方言の今昔』南日本新聞開発センター

北山易実(1965)「漁村のことわざ(その3)」『うしお』110号 鹿児島県水産試験場

村山七郎(1965)『漂流民の言語』吉川弘文館

村山七郎(1985)『新スラヴ・日本語辞典』ナウカ